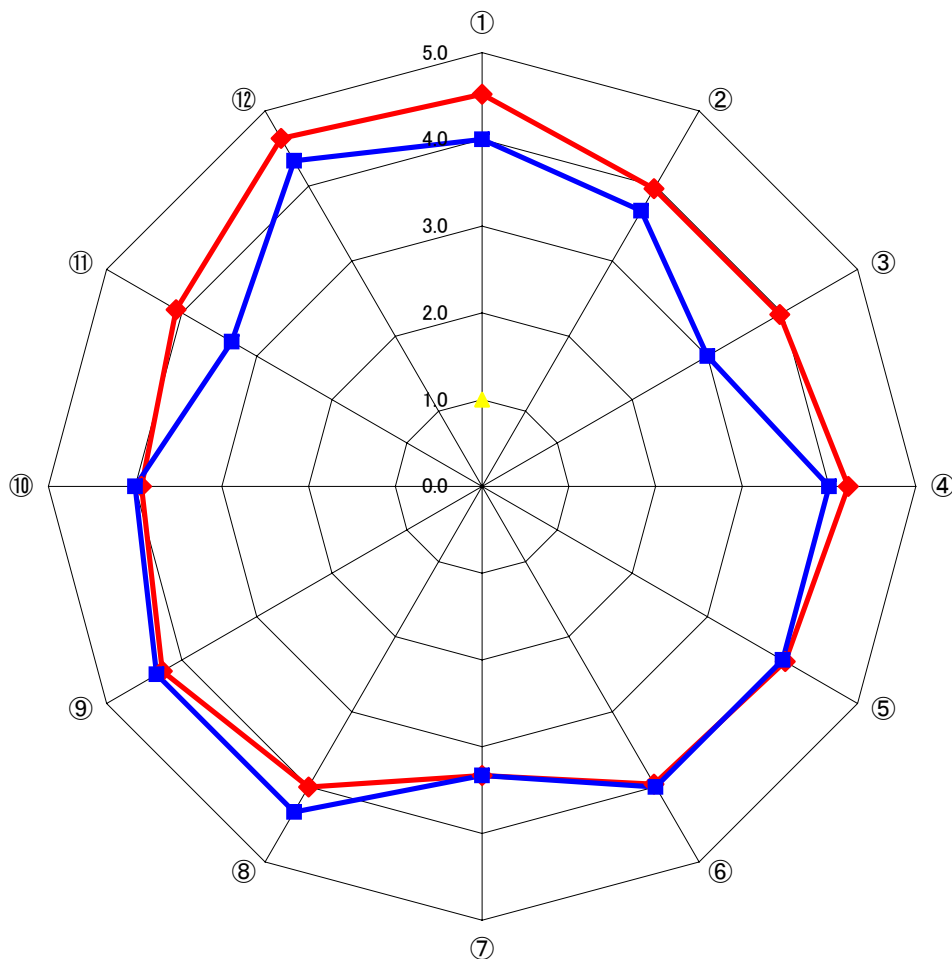


## 平成23年度古河三高の学校教育目標に迫る12重点目標への取り組み状況(全回答教師)と生徒の被教育実感との比較(第1学期)

### 【レーダーチャートの番号】

1 上級学校進学を実現する(①~③) 2 家庭学習の習慣化(④, ⑤) 3 豊かな人間性…(⑥~⑨) 4 広報活動の充実(⑩) 5 個に応じた指導(⑪, ⑫)



◆ 全教師(第1学期)

■ 全生徒(第1学期)

### 【考察例】

以下に提示する結果は、質問紙の内容から分かるとおり、目標の達成状況ではなく、目標へ向けた教育実践(生徒の場合は先生方からの被教育実感)の状況です。

①~⑫(外周の番号)の重点項目ごとに全回答者の5段階評価点の平均をダイヤグラムで示した。中心に近い項目ほど実践しているという意識が少なく、外に広がっている項目ほど、目標に向けて積極的に実践したと意識していることを示す。

・既にお返した個人の結果と全回答教師(回答率は57.4%です。任意に回答する行為は組織や学校経営への参画意識=学校全体のことを自分ごととして意識したことが外観に現れた行為でもある。)の結果を比較してみましょう。

・全教師の自己目標は学校の12重点項目等と連鎖しているので、全教師の結果は古河三高(組織)が学校目標に対して実践している度合いと見ることもできるだろうし、一人一人の回答者の自己目標に対する実践度を判断する参考資料として利用することもできます。

・生徒側の被教育実感の結果と教師側の実践意識とのギャップを比較した時に大きい項目ほど、教師が実践している割には生徒がそれを受けとめていないので、生徒への関わり方(コミュニケーションの在り方等)を考え直してみる必要があります。

・例えば、③⑪などの項目でしょうか。

③では講演会や説明会で代表される学校側からイベントを提供する時には、どのような進路情報を収集するのに有効で意味があるものなのかを事前事後に話をするとか、⑪では三者面談や二者面談で多くのことを伝達する目的は「あなたにより良く変わって欲しいからだ」…などと言葉掛けをしてみる…など。

